

平成 30 年 5 月 6 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03221

研究課題名(和文) 東アジア圏の複言語主義共同体の構築 多言語社会香港からの示唆

研究課題名(英文) Constructing Plurilingual Communities in East Asia: Implications from Hong Kong

研究代表者

河合 靖 (Kawai, Yasushi)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：60271699

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、東アジア圏における多層言語環境での複言語主義的な言語政策や人材育成の必要性の考察である。香港では多層言語環境が人々に日本と異なる影響を与えている。言語とコミュニケーション、言語教育政策と学習者、教育と技術の三つの視点からその影響を見ることで、多層言語環境化する日本が考えるべき問題を洞察した。日本がモノリンガル社会の心的制約を克服して、複言語主義的社会モデルに移行し、複数言語を行き来する態度と能力を持つトランスランゲージング的人材を育成するための知見が得られた。本研究の研究成果は、研究成果報告書(250頁)として編集・印刷された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the necessity of plurilingual language policy and human resource development in a multilayered linguistic environment in the East Asian region. Multilayered linguistic environments are influencing people in Hong Kong, in a variety of different ways from Japan. We analyzed this from the following three perspectives: language and communication, language education policy and language learners, as well as education and technology. By doing so, we received insights into how to solve problems in the multilayered language environments that Japan will face in the near future. Japan must overcome the mental constraints of a monolingual society, shift to a plurilingual social model, and develop translanguaging human resources with attitudes and abilities to use multiple languages. Several means to achieve these goals were suggested in this research. The results of this study were edited and printed in a 250-page research report.

研究分野：応用言語学

キーワード：多層言語環境 複言語主義 トランスランゲージング 多言語社会モデル 人材育成

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始時に背景としてあげた日本および東アジア圏の社会的変化は、日本、中国、韓国の間における人と情報の行き来の拡大による、多言語・多文化社会の到来であった。東アジア諸国は、基本的にはモノリンガル社会と捉えられ、それがグローバル化の波の中でそれぞれに多言語社会への変貌を迫られているという認識をしていた。多言語・多文化社会としての国際的な地域融合の先例としてはヨーロッパがあり、そこで提言されていた複言語主義に基づいたマルチリンガルの価値観、具体的には、学んでから使うのではなく、使いながら学び、身につけていく態度と、不完全な第二言語能力を許容する寛容さを持つ社会への移行が必要であると考えていた。

(2) 東アジア諸国はモノリンガル社会であるが、そこにも多言語環境の地域は存在し、香港はその典型の一つであると考えた。そこで、香港の学校教育における教育媒介言語の変遷や、地域言語の言語的特徴、その地域と日本を結んだ実験的な言語教育の試行を行うことで、日本のモノリンガルの言語価値観の変更に向けて示唆が得られるという意図が、本研究の初動動機づけであった。

2. 研究の目的

本研究の研究期間は3年間で、最終的には東アジア圏での複言語主義的な言語コミュニティの創生を目指しているが、本研究はその最初のプロジェクトとして、アジア圏で多言語環境の代表である香港をとりあげ、その実態と課題を考察し、あわせて香港と日本の学生が互恵的に日本語・英語・中国語の学習を行う教育システムを試行した。香港におけるこのプロジェクトが成果を収めることは、その後、他の東アジア地域で同様の手法による研究を進める礎となると考えた。

3. 研究の方法

(1) 本研究の目的遂行のため、次の5つの方法を用いた。

香港の教育制度における言語政策の変遷と現況の現地調査

香港在留日本人子女の言語教育状況の現地調査と彼らの言語習得状況の実態調査

香港居住者の使用言語に関する対照言語学的考察

香港の中国人大学生の日本語学習者への日本語・日本文化に対する意識調査

香港と日本の学生による互恵的の外国語共修システムの構築と試行

(2) 上記5つの研究課題を考察対象により3つのグループに分けて研究を進めた。

言語とコミュニケーションのグループでは、東アジア域内で使用・学習されている言語の特徴および差異を対照言語学などの

手法を用いて分析し、言語接触場面での誤解やコミュニケーションの断絶の原因解明と解決への示唆を行った。

施策と学習者のグループでは、東アジア域内の言語教育政策を国際的な視点から考察し、第二言語習得・教育心理学の知見に基づいて自律的の第二言語学習者の支援へ向けた示唆を行った。

教育と技術のグループでは、理論言語学・応用言語学・教育工学などの知見を援用して、第二言語教育の先進的あるいは実験的事例を検証・考察し、複数言語話者の育成を促進した。

(3) これらの研究活動を行いながら、年に1回~2回、研究分担者が連携協力者および関係分野の専門家や教育実践者を交えて、香港あるいは日本で研究成果を途中報告しながら、適宜改善を加えて、最終年度に国際シンポジウムを開催した。

4. 研究成果

(1) 本共同研究は、東アジア圏における多層言語環境化の現状を踏まえて、複言語主義的な言語政策や人材育成の必要性の考察および具体的提言を行うことを目的としていた。この目的に向けて本研究がどのような貢献をなしたかを見ていく。

言語とコミュニケーションの視点で行われた研究では、広東語と日本語の終助詞、あるいは日本語、中国語、英語の可能表現の類似性を考察した。こうした知見を蓄積することで、言語がコミュニケーションで果たす普遍的な役割や、言語間の差異を克服する方向に向けた示唆となりうるのではないかと考える。研究の初めでは、域内の言語の違いをどう克服するかはその言語的違いに焦点をあててお互いに理解することが重要であるという暗黙の理解があったが、研究を進めるうちに、それぞれの言語に共通する普遍的な側面に目を向けることが、言語の違いを超えたコミュニケーションのエッセンスに対する理解につながり、そのことの方が多言語社会でのコミュニケーションを考える上では重要なのではないかという気づきを得た。今後は多言語環境での第2言語話者の言語使用に関する分析を言語学的に進める必要がある。

施策と学習者の視点で行われた研究では、香港の学校教育制度における媒介言語の実態や、香港の日本語学習者に見る日本のポップカルチャーが学習意欲に与える影響、香港在住の継承日本語学習者が置かれた多様な学習環境と彼らのバイリンガル能力の発達、香港の大学レベルの日本語教育における複言語主義的視点からの教育改革の報告、香港留学中の中国人大学生の考える「グローバル」概念の考察などが行われてきた。多層言語環境としての香港がそこに生きるさまざまな人々に日本とは異なるあり方で影響を

与えていることを見ることで、多層言語環境化するこれからの日本が考えるべき問題への具体的な手掛かりが得られるが、多言語環境での第2言語習得やバイリンガル教育に関する研究の集積が必要である。

教育と技術の視点で行われた研究では、インターネット環境を利用してオンラインで言語交換学習を試行した報告や、日本の高校生の中国語教育におけるインターネットを利用した遠隔交流の学習者に対する影響の分析が行われた。多層言語環境化への過渡期にある日本では、意識としてまだ多層言語環境という状況が実感できない人の割合が多いことも事実であり、情報通信技術を利用して疑似体験することはある程度そうした問題を克服できる可能性があるだろう。通信技術の発達によるネット社会の出現は、現代の多層言語環境化のもっとも先鋭的な特質であり、さらなる研究の進展が求められる。

(2) 以上のように、3年間の共同研究によって当初の研究の目的は一定程度達成できたと考えられるが、それはまだ限定的であり、次のような問題点も議論された。

本科研プロジェクトの研究の動機は、所謂「グローバル化」にともなう日本の多層言語環境化に対応するための方法として、東アジア圏を1つの言語交流圏としてとらえ、その中で日本がどのような施策を講じていくことが可能か、アジア圏における多言語環境の先達である香港を研究フィールドとすることで考察の糸口とするところにあった。香港住民の主要な使用言語である広東語の特徴や、教育媒介言語に注目した香港の学校制度、日本語を継承言語とする香港住民が、香港に住むがゆえに持つ特異性を考察することで、香港を中心に多層言語環境研究の研究活動を展開する意義はあったという見方がある反面、ヨーロッパの複言語主義が香港で働いているわけではないので、ヨーロッパ型の多層言語環境を想定した本プロジェクトの趣旨からは直接的な関連づけをすることは難しいと指摘できる。だが、ヨーロッパとアジアはそれぞれに文化・歴史・社会的に異なる背景があるなかでも、複言語主義をアジア的にアレンジすることが意識的にせよ無意識的にせよ行われるはずである。その意味からも香港を選択したことにはかえって意義があったと言えるのではない。

本科研プロジェクトは当初から東アジア全域にわたる多層言語環境研究への拡大を想定しており、漸次研究フィールドは広がるのが織り込み済みであった。科研費を利用して開催した国際シンポジウムに出席した台湾の高雄科技大学の4名の研究者は、台湾の言語政策に関する報告を行っており、台湾がすでにまさしく多層言語環境社会であって、そこに存在するそれぞれの使用言語をどのように捉えて命名し概念化していくかで、言語政策の方向性が変わってくるとい

う気づきを我々にもたらした。これまでの多層言語環境化は交通手段や情報通信技術の飛躍的發展によるグローバル化という現代的な問題と関連づけて意義が語られてきたが、日本は本来多様な言語文化集団を内包する存在であったのが、明治以降の歴史的経緯の中で単一民族・単一文化・単一言語の島国という神話的ステレオタイプが醸成されてきた。この気づきは、多層言語環境研究を別の位相へと移行させるかもしれない。

以上を考えると、これまでは香港の次は台湾や韓国、中国などへ地域的に対象を拡大するという方向性を持っていたが、日本国内に昔から内在する多層言語環境性を見ていくことも重要な課題と言える。沖縄や北海道もそうであるし、聾者コミュニティをフィールドに日本手話を対象とすることも十分多層言語環境研究の趣旨に合致してくる。そこで見られる多数派グループの意識と、所謂現代的なグローバル化の結果としての多層言語環境化で日本に入ってくるニューカマーに対する日本人の態度との相似性などは、本研究プロジェクトの研究テーマと相性がよいと思われる。

(3) これまでは英語やそれぞれの母語をコミュニケーションの媒介言語とする社会をどのように構築するかという視点が大きかったが、そのこと自体が一つのイデオロギーの体现であった。多様な立場や視点からの研究が混在することの方が、複言語主義的な言語コミュニティの構築への提言につながるのではない。しかし、研究を進める上では、複数の視点を併せ持ったままで研究計画を立て、考察・分析を行うことは難しい。研究の位置づけについては今後さらに検討が必要である。

本共同研究における研究成果は、研究成果報告書として編集・印刷された。これを書籍化し出版する可能性について、出版社に助言を求める等の活動が進行中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計18件)

1. 飯田真紀(2018). 粵語句末助詞 gE2 的語義和語義變化, 中國語文通訊 (Current Research in Chinese Linguistics) (査読有) 97(1)(第二十屆國際粵方言研討會特刊), 19-31.
2. 飯田真紀(2018) 『広東語の文末助詞 gE2 の意味と意味変化—对人的機能からテクスト構成的機能へ』 『東アジア圏の複言語主義共同体の構築研究成果報告書』(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院) (査読無) 1, 35-52, <http://translanguaging.sakura.ne.jp/hk/p48/?p=714>
3. 今泉智子(2018) 「小説の対訳データから

- 見る日本語・英語・中国語可能表現の特徴」『東アジア圏の複言語主義共同体の構築研究成果報告書』(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院)(査読無)1, 53-68,
<http://translanguaging.sakura.ne.jp/hk/p48/?p=714>
4. 横山吉樹(2018)「多層言語社会における教育政策と制度について—香港の後期イマージョン教育の現状と展望—」『東アジア圏の複言語主義共同体の構築研究成果報告書』(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院)(査読無)1, 68-79,
<http://translanguaging.sakura.ne.jp/hk/p48/?p=714>
 5. 小林由子(2018)「香港における日本語学習と日本のポピュラーカルチャーの関連—内発的動機づけの観点から—」『東アジア圏の複言語主義共同体の構築研究成果報告書』(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院)(査読無)1, 79-97,
<http://translanguaging.sakura.ne.jp/hk/p48/?p=714>
 6. 佐野愛子(2018)「複数言語社会香港における継承日本語学習者の多様な言語学習環境」『東アジア圏の複言語主義共同体の構築研究成果報告書』(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院)(査読無)1, 98-124,
<http://translanguaging.sakura.ne.jp/hk/p48/?p=714>
 7. 萬美保(2018)「香港大学日本語スタンダード策定について」『東アジア圏の複言語主義共同体の構築研究成果報告書』(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院)(査読無)1, 125-140,
<http://translanguaging.sakura.ne.jp/hk/p48/?p=714>
 8. 河合靖・河合剛(2018)「香港と日本の大学生によるオンライン言語交換学習」『東アジア圏の複言語主義共同体の構築研究成果報告書』(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院)(査読無)1, 141-171,
<http://translanguaging.sakura.ne.jp/hk/p48/?p=714>
 9. 山田智久(2018)「グローバル」という概念を日本人大学生はどのように捉えているのか—日港学生のPAC分析比較調査から—」『東アジア圏の複言語主義共同体の構築研究成果報告書』(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院)(査読無)1, 172-186,
<http://translanguaging.sakura.ne.jp/hk/p48/?p=714>
 10. 三ツ木真実(2018)「多層言語環境に生きる英語話者とのコミュニケーション—オンライン英会話を取り入れた授業実践と学習者の評価—」『東アジア圏の複言語主義共同体の構築研究成果報告書』(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院)(査読無)1, 187-205,
<http://translanguaging.sakura.ne.jp/hk/p48/?p=714>
 11. 飯田真紀(2017)「粵語句末助詞“嘅”の語義和语法化途径」《中国语文》(査読有)4(总第379期),421-437.
 12. 小林由子(2016)「日本語学習研究における内発的動機づけの再検討」『北海道大学国際教育研究センター紀要』(査読有)20, 81-92.
 13. 杉江聡子(2016)「日本と中国の遠隔交流が創出する質的価値の探究」『中国語教育』(査読有)15, 105-123.
 14. Sugie, S., & Mitsugi, M. (2016). Learning experiences and their values created by distance learning—A qualitative analysis of Chinese language learning through cross cultural exchange, Proceedings of 9th International Conference and Workshops on Technology and Chinese Language Teaching. (査読有)265-270.
 15. 飯田真紀(2015)「粵語句末助詞“嘅 ge2”の两种功能和交互主观化现象」《第十八届国际粤方言研讨会论文集》,孙景涛・姚玉敏主编(査読有),113-127.广州:暨南大学出版社.
 16. 杉江聡子, 三ツ木真実(2015)「遠隔交流を活用した中国語ブレンディッド・ラーニングの実践と混合研究法による評価」『教育システム情報学会学会誌』(査読有)32(2), 160-170.
 17. 杉江聡子, 三ツ木真実(2015)「遠隔交流が創出する学びの経験とその価値—中国語学習における異文化体験の質的分析」『e-Learning 教育研究』(査読有)10, 1-13.
 18. 杉江聡子, 三木真実(2015)「利用远程交流的混合式学习实践与其成果的质性分析—以日本高中中文课为例」『中文教学现代化学报』(査読有)8, 107-117.
- 〔学会発表〕(計37件)
1. Kawai, Y., Kobayashi, Y., Sano, A., & Mitsugi, M. (2017). Diverse landscapes of language teaching in Asia: What language teachers can learn from each other, The 34th International Conference on English Teaching and Learning. (2017年5月20日, 国立高雄第一科技大学)(高雄,台湾)
 2. Kawai, Y. (2017). Combining Online Language Exchange with Public Speaking. 国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」.(2017年3月9日, 北海道大学)
 3. Iida, M. (2017). A morphological analysis of the combinations of the sentence-final particles in

- contemporary Cantonese. The 22nd International Conference of Yue Dialects. (2017年12月8・9日, 香港教育大学, 香港).
4. Sano, A. (2017). Educating Deaf students as bilinguals: The cases in Japan and Hong Kong. 国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」.(2017年3月9日, 北海道大学)
 5. 飯田真紀 (2017). 「跨語言視角下粵語句末助詞的的定位問題～與日語句末助詞的比較～」国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」(2017年3月9日, 北海道大学)
 6. 今泉智子 (2017). 「日本語・英語・中国語の可能表現—意味地図を用いた多義関係可視化の試み—」国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」.(2017年3月9日, 北海道大学)
 7. 今泉智子 (2017). 「可能表現にみるモダリティとヴォイスの相互関係—対訳データに基づく意味地図の可能性—」日本認知言語学会第18回大会.(2017年9月16・17日, 大阪大学).
 8. 佐野愛子 (2017). 「複言語社会香港での子育てにおける親たちの選択」研究報告会「言語系春のコロキウム2017」(2017年3月9日, 北海道大学)
 9. 杉江聡子 (2017). 「通過遠程交流創造出來的質的価値—中國學生的觀點分析」国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」.(2017年3月9日, 北海道大学)
 10. 山田智久 (2017). 「多言語社会における日本人学生の「グローバル」の捉え方に関する調査」国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」.(2017年3月9日, 北海道大学)
 11. 横山吉樹 (2017). 「香港のバンドシステムにおけるEMIの評価と今後の可能性」国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」.(2017年3月9日, 北海道大学)
 12. 横山吉樹 (2017). 「イメージ教育再考—香港後期イメージ教育の現実と問題点」(2017年8月19・20日, 島根大学)
 13. 萬美保 (2017). 「『JLPTUFS アカデミック日本語 Can-do リスト』への期待」国際シンポジウム「『JLPTUFS アカデミック日本語 Can-do リスト』の活用に向けて」.(2017年1月27日, 東京外国語大学)
 14. 萬美保 (2017). 「外部指標としてのCan-do リストと単位互換のプロセスについて」(パネル発表)国際シンポジウム「日本語教育実践の過程と成果の可視化に向けた記述枠組み」.(2017年3月7日, 名古屋大学, 愛知)
 15. 萬美保 (2017). 「教師または大学主導による学生のための国際体験」国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」.(2017年3月9日, 北海道大学)
 16. 萬美保 (2017). 「学習活動としてのディベート: SOLO 分類による行動観察」国際シンポジウム「今、そこにある多層言語環境」.(2017年6月28日, 北海道大学)
 17. Sugie, S., & Mitsugi, M. (2016). Learning Experiences and their Values Created by Distance Learning—A Qualitative Analysis of Chinese Language Learning through Cross Cultural Exchange—, The 9th International Conference and Workshops on Technology and Chinese Language Teaching.(2016年5月27-29日, マカオ大学)(マカオ, 中国)
 18. 飯田真紀 (2016). 「終助詞(文末助詞)の機能と特徴～広東語・北京語・日本語の場合～」国際シンポジウム「東アジアの言語コミュニケーションを考える・多層言語社会香港からの示唆」(2016年3月8日, 北海道大学)
 19. 飯田真紀 (2016). 「広東語と日本語の終助詞について」公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」.(2016年6月25日, 香港大学)
 20. 飯田真紀 (2016). 「広東語の文末助詞aalmaa3の意味変化」日本言語学会第153回大会.(2016年12月3・4日, 福岡大学)
 21. 今泉智子 (2016). 「能力・可能性を表す表現の多義性について—日・中・英語の比較—」国際シンポジウム「東アジアの言語コミュニケーションを考える—多層言語社会香港からの示唆」.(2016年3月8日, 北海道大学)
 22. Imazumi, S. (2016). Typological study on expressions of ability and possibility in English, Chinese and Japanese. The 8th Conference on Language, Discourse and Cognition. (2016年5月13・14日, 国立台湾大学)
 23. 今泉智子 (2016). 「出来事を話す際に用いられる「のだ」について」公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」.(2016年6月25日, 香港大学)
 24. 河合靖 (2016). 「オンライン・タンデム・ラーニング: ボーダーレスな互惠・自律・協学」2016年度第2回JACET北海道支部研究会.(2016年11月13日, 北海道文教大学, 北海道)
 25. Kawai, Y., & Mitsugi, M. (2016). Hong Kong and Hokkaido online language exchange program. 国際シンポジウム「アジアの言語コミュニケーションを考える—多層言語社会香港からの示唆」.(2016年3月8日, 北海道大学)
 26. 河合靖, 河合剛, 山田智久, 三ツ木真実

- (2016).「香港と日本の大学生によるオンライン言語交換学習」公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」.(2016年6月25日, 香港大学)
27. Sano, A. (2016). Literacy development of Japanese-English bilinguals growing up in multilingual Hong Kong. 国際シンポジウム「アジアの言語コミュニケーションを考える—多層言語社会香港からの示唆」(2016年3月8日, 北海道大学)
28. 佐野愛子 (2016). 「多言語社会香港に育つ日英バイリンガルの作文力」HELES・JCA 北海道支部・JACET 北海道支部三学会合同研究会シンポジウム「アジアの英語教育」.(2016年3月6日, 札幌市立大学, 北海道)
29. 佐野愛子 (2016). 「香港在住の日英バイリンガル児童の作文力の発達に関する考察」 公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」.(2016年6月25日, 香港大学)
30. 杉江聡子 (2016). 「遠隔交流を活用したブレンド型学習のためのインタラクショナル・デザイン」, 国際シンポジウム「東アジアの言語コミュニケーションを考える—多層言語社会香港からの示唆」.(2016年3月8日, 北海道大学)
31. 杉江聡子, 三ツ木真実 (2016). 「遠隔交流が創る異文化体験とその価値—質的分析によるアプローチ—」『第14回 e-Learning 教育学会大会』.(2016年3月13日, 金沢大学, 石川)
32. 杉江聡子 (2016). 「遠隔交流を活用した中国語ブレンド型学習の経験が創出する価値」公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」.(2016年6月25日, 香港大学)
33. Yokoyama, Y. (2016). Late immersion and band system in Hong Kong. 国際シンポジウム「アジアの言語コミュニケーションを考える—多層言語社会香港からの示唆」(2016年3月8日, 北海道大学)
34. 横山吉樹 (2016). 「香港の中等教育における EMI について:COLT 観察法を用いた分析」公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」.(2016年6月25日, 香港大学)
35. 飯田真紀 (2015). 「広東語の文末助詞“gE2”の意味変化」日本中国語学会北海道支部例会.(2015年9月11日, 釧路公立大学, 北海道)
36. 飯田真紀 (2015). 「粵語句末助詞 gE2 的語義和語義變化」第二十屆國際粵方言研討會.(2015年12月12日, 香港中文大學, 香港)
37. 横山吉樹 (2016). 「香港のイマージョン教育について」大学英語教育学会北海道支部第3回研究会(2016年3月6日, 札幌市立大学, 北海道)

〔その他〕
ホームページ等
<http://translanguaging.sakura.ne.jp/hkp48/>

6. 研究組織
(1)研究代表者
河合 靖 (KAWAI, Yasushi)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授
研究者番号: 60271699

(2)研究分担者
佐野 愛子 (SANO, Aiko)
北海道文教大学・外国語学部・准教授
研究者番号: 20738356

小林 由子 (KOBAYASHI, Yoshiko)
北海道大学・国際教育研究センター・教授
研究者番号: 30250517

飯田 真紀 (IIDA, Maki)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号: 50401427

横山 吉樹 (YOKOYAMA, Yoshiki)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 70254711

河合 剛 (KAWAI, Goh)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授
研究者番号: 70312981

山田 智久 (YAMADA, Tomohisa)
北海道大学・国際教育研究センター・准教授
研究者番号: 90549148

杉江 聡子 (SUGIE, Satoko)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・特任助教
研究者番号: 90795048

三ツ木 真実 (MITSUGI, Makoto)
北海道文教大学・外国語学部・講師
研究者番号: 80782458

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
今泉 智子 (IMAZIMI, Satoko)
北海道大学・大学院国際広報メディア・観光学院博士後期課程・院生

萬 美保 (YOROZU, Miho)
香港大学・日本研究学科・上級講師